

本居宣長の奈良旅行

——『菅笠日記』ではない奈良旅行日記——

伊藤純

一 はじめに

本居宣長・奈良となると、誰しもが宣長四三歳、一七九五年（寛政七）に版行された『菅笠日記』すががさのにきを思い浮かべるであろう。

しかし、宣長が奈良を訪れたのは、『菅笠日記』の他に、通過したのも含めると六回に及ぶ。

一回目は宣長二三歳、一七四二年（寛保二）七月一日に松坂を立出し、吉野水分神社、大峰山上、高野山、長谷寺を参詣し七月二日に松坂に帰着した九日間の旅行である。

二回目は宣長二八歳、一七五三年（宝暦三）三月から京都遊学を終え、一七五七年（宝暦七）一〇月に、松坂に帰るにあたって、奈良を経由し、いくつもの地点で奈良を見聞している旅行である。

三回目は宣長四三歳、一七七二年（明和九）三月に吉野、明日香を巡った旅行である。この時の旅行記が『菅笠日記』である。

四回目は宣長六五歳、一七九四年（寛政六）一〇月和歌山行きの際に、高見峠を越え吉野、五條を通過している。

五回目は宣長七〇歳、一七九九年（寛政一一）和歌山

からの帰郷の際、二月二五日に吉野水分神社に参詣している。

六回目は一八〇〇年（寛政一二）一月からの和歌山での務めを終え、翌一八〇一年（享和元）二月二三日和歌山を發ち、大坂、奈良を経由し松坂へ帰る途上の奈良旅行である。この年の九月、宣長は七二歳で没する。

このうち、二回目一七五七年と六回目一八〇一年の旅では、宣長は詳細な日記見聞記を残している。そこには宣長の眼に入った奈良の風景が記述されている。しかし、この二回の旅行は、奈良論においてほとんど注目されてこなかった。

小文では、一七五七年と一八〇一年の日記を紹介し、宣長の記述を読みながら、合わせて今日では地上に残っていない、宣長の眼に映った風景を『大和名所図会』（一七九一年）から想像してみたい。

なお、宣長の日記は仮名で綴られている部分が多く、一読しただけでは理解しづらい。そこで、宣長が仮名で表記している部分について、前後の文脈から私の判断で漢字に変え、改行もした。私の当てた漢字が誤りであれ

ば、私の理解不足であることは言うまでもない。不審な部分があれば宣長全集によって宣長の文字を確かめていただきたい。

二 一七五七年（宝曆七）二八歳の奈良旅行

〔在京日記〕『本居宣長全集』一六卷一三四頁〕

京都での遊学を終え、奈良を経て四日三泊をかけて松坂に帰る際の日記（図一）。

一〇月三日

今日なん都を發ちて、初瀬へ詣で、開帳し奉りて帰るなり。

（京都から南下し木津までの道中は省略）

木津川、舟にて渡る。是なん泉川なりける。是の辺り名のある所々多かれど、心慌ただしくて訪ね見るべくもなき旅なれば、いと口惜し。

さて、奈良近くなる辺りより、かの山も見えずなりぬ。

今こそ愛宕の名、荷負う（？）心地す。

玉水のほとりにて、里人の南を上と云い、北を下と云

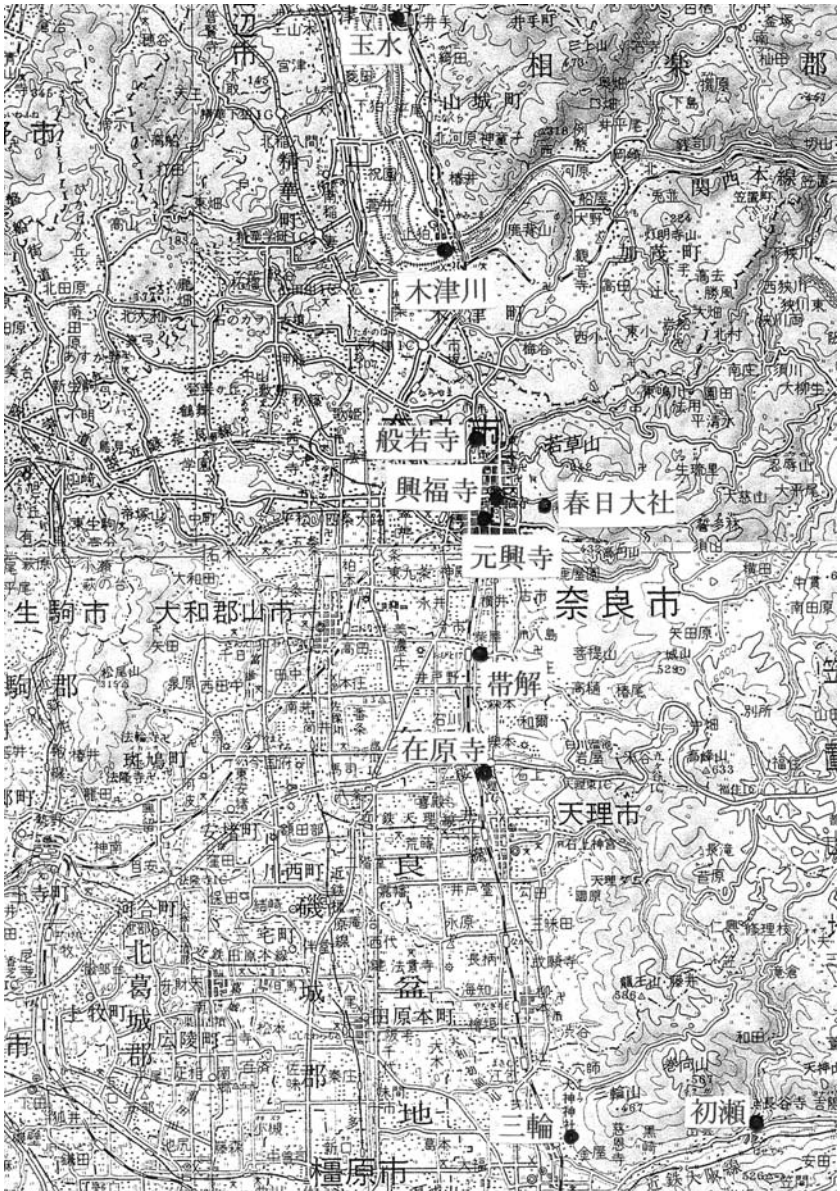


図1 1757年（宝暦7）奈良の行程

うを聞けば、訝しくて、何処にても京の方をこそ上とは云え、ここにてはいかでか京の方を下とは云うぞと問えば、さなん。奈良の方を上と申し侍ると云らふる。さるは、古へ奈良の京のそのかみより云い習えることの、今に改めずして云い来るにやと。いと素生（由緒）に覚ゆ。

般若坂⁽¹⁾と云うより奈良に入る。そも未だ奈良は見侍らねば、年比（年頃）良き所と聞きて、来まほしく思いつたりし所なれば、いと珍し。駕籠に乗りて過ぬ。般若寺と云える額を門に懸けたる寺あり。駕籠の内より見る。此の寺なども、聞き及びぬる古き寺にて、かの額のさまも、大方ならず古く由あるさまなれば、入りて詣てまほしけれど、え詣らず。

また三・四間ばかりなる橋あり。此の橋を渡るとて、ふと川の流れを見遣りたれば、川中に杭立てり。佐保川と記したり。此の佐保川よ、昔より名高き川なるが、さる物めかしき（目立つような）流れにもあらざれば、此の杭なからましかば、知らでぞ過ぎましょと思ふ。全て此の辺り、名所限りもなき都の跡なれば、いずれも古き

所々、多くは斯様にてぞあるらんと、いと訪ね見まほしけれど、何処へもえ罷らず。いといと口惜し。此の佐保川も、町屋の内を流れたる小川にて、さる所とも見えざりけり。

さる茶屋に駕籠降ろしぬ。この向いに大きな寺の門あり⁽²⁾。これや興福寺・東大寺などと云う寺にやと見やられて、目留まる。ここにて駕籠より降りてしばし休み、さてかの門に入て、奥深く行く。いと大きな寺にて、そこはかと限りもなし。僧坊多く見えたり。右の方にやや近く大仏殿見えたり。ここは大仏殿の後の方なり。東より廻りて大仏殿に詣ず。京のよりはやや殿も狭く、仏も少し小さく見え給う⁽⁴⁾。されど脇士などもおわしまし、近來再興ありし堂なれば、全ていずこもいずこも京のよりは綺麗に見えたり。堂も京のよりは小さければ、高く見えて格好良し。堂のさま廻廊なども、京のと同じさまにて建てられたり。さて所のさまは、京の大仏よりもはるかに景地よき所なり。

日もやや傾ぶくほどなれば、心静かにも見え侍らず。ただ大方に見廻りぬ。さて二月堂の辺りもよき景地

なり。三笠山・若草山並びたる下を過ぐ。三笠の山は、
げに木もなくてすんべり(滑り)として、笠をうつふけ
(打ち付け)たらんようなり。若草山は木深く繁れる山
なり。⁽⁵⁾

それより春日の御社に詣ず。いと木深く繁りたる奥の
宮居、神さび神々しき所の限りなり。灯籠数も知らず立
てり。傍らの梢を見れば、猿の多くいたる、いと物深
し。御社の前にかしこまりて額づく。四所の宮居いと
神々し。

今來たる道は正面にはあらず。これより出る道なん本
道正面なりける。社を立て、猿沢の池の方へと出るほ
ど、御山の間いと遠く物深く繁りあいたり。鹿の人に馴
れて、気近く立ちさまよい歩く。いと珍し。角は皆切り
たり。⁽⁷⁾

さて行き行きて、鳥居のある所に出ず。ここなん春日
社の入口也。ここに續きて興福寺あり。南円堂の觀世音
に詣ず。伽藍皆焼け失せて、石すえ(礎/いしづえ)の
みの野良なり。南円堂も焼けて、觀音は飯堂におはしま
す。此の堂たたむ(建てん)とて、今地形突き普請あ

⁽⁹⁾り。五重の塔のみ残りて高く立てり。

さて南大門の焼け跡より出る。此の南大門の前、即ち
猿沢の池なり。南の方に遙かに、いずこの塔やらん高く
見ゆ⁽¹⁰⁾(図2)。此の池の辺りの景色、えも云わず優れた
る景色なり。およそ我が御門、六十余国のうちに、此の
興福の南大門を出たる所の光景に並ぶ所はなしとかや。
哀れ此の門のあらましかは、いかに厳めしからんと、い
と新し。此の池の水いと清く澄みわたりて、水草もなく
塵もなく、いといと綺麗なる池なり。東は春日の御社若
草山、北は興福寺、西南は町屋なり。

しばし此の池辺に休らいて、心静かに見まほしけれ
ど、日もようよう暮方にて、入相の鐘も聞ゆれば、慌た
だしく立ぬ。此の池の西の町屋、即ち宿屋ある所なれ
ば、某の屋に宿りぬ。

一〇月四日

また夜深く発つ。奈良の町屋を過るほど、夜の内なれ
ば、何のあやめ(怪め/不審)もなし。提灯の明かりに
て見れば、軒の下に、鹿ここかしこに伏しいたり。いと

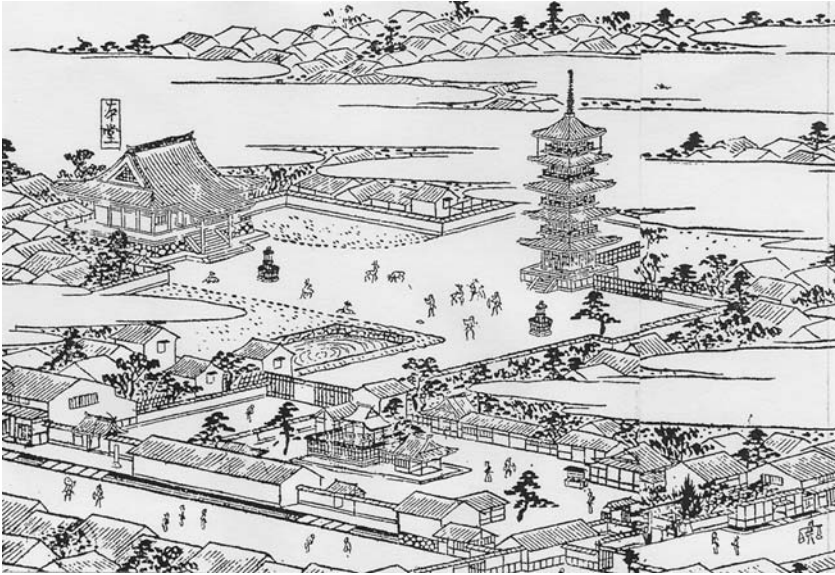


図2 元興寺五重塔（大和名所図会）

珍し。

帯解・在原寺⁽¹¹⁾（写真1・図3）など過てもまだ夜明けず。いずこもいずこも何の甲斐なく過ぐ。そもそも奈良の辺りは、心留めて細やかに見まほしけれど、慌ただしくて過ぬれば、西大寺の方へもえ罷らず成りぬ。

三輪にて物喰いて、明神へ詣ず。三輪の里より鳥居を入りて、並木を経て、やや山に上る所なり。御社は、拝殿新しく綺麗に見ゆ⁽¹²⁾。みあらか（本殿）なくて、ただ杉深く繁りたる御山を指して拝み奉る。それより三輪の里には出でず。山中を越えて先へ出たり。

午の時に初瀬に着く。宿屋に入りてしばし休み、さ^{あるじ}て主として、開帳のこと寺へ申し遣る。明日となりては、道の積りもよろしからねば、今日よりと思うに、不成就日なれば、申の時よりと頼まる。そもそも村田氏、年毎にこの御寺の開帳し奉らるる、いと尊きことなり。此の寺の開帳と申すは、一・七日の間なり。初一日は、脇に立ち給う天照太神⁽¹³⁾・春日明神の像をも拝ませ侍る。料は金七両二歩なりける。

雨や降り出ぬ。この初瀬の里は、初瀬川の流れ、人



写真1 在原寺本堂（現・西融寺）



図3 在原寺（大和名所図会）

家の裏を流れ侍る。この家の隣に水車あるにや。いと姦かしましきに、川水の音に響き合いて、雨強う降るようなれば、障子開けて見ればさしも降らず。

申の時にや、御寺より案内あれば、宿りを出て詣ず。昔幼かりしほどに詣でたりしことは有りしかど、はかば

かしくも覚え（15）ず。初めてに異ならず。いと珍し。山の付まみ、堂々坊舎などのさま、いと麗しく絵に描きたらんように見上げらる。いにしえより此の観音は、変わらぬ人の信じ奉りて、古今人多く詣で、繁盛なる御仏なり。門を入れて、廊の呉橋を上り、本堂に詣ず。僧衆出て、はや法事始まりたり。読経、陀羅尼、行道、何くれとやや長し。

里人、此の寺の所化（諸家修行の僧）など詣で混みたり。願主の座は、皆人の拜む所に、ことさらに新しき薄縁二ひら（片）敷きたり。さて御緞帳の下がるほど、いと尊し。世の常の帳は上へ開くるを、これは下へ降ろすなり。御仏はいと大きにて、いみじう尊し。（16）さてなおし

ばし法事あり。大なる板の御札をとうてて（取う出て／取り出して）与う。屋と（宿）の主、取り付きて持て来。脇士へ供えし神酒など、抱し下して頂かせたり。雨やや強く降り出たり。

さて御堂を出て、元の呉橋を下り、宿りに帰り休みぬ。女の出で来て臥具を出したるに、布団のみにて夜着なかりければ、「よぎ」を致せと云わせれば、「よぎ」とは何のことにやとて知らず。「よぎ」とは夜着の事と笑う。やや心得て、ながの（長／長掛）のことなめりて、夜着持て来たり。ここはむげに田舎とも云うまじきに、かく近き物の名の変はるもおかし。後につくづくと思へば、此の地に「與喜（よき）天神」と申すがいまそかれば、⁽¹⁷⁾此の名を避けて、夜着を「なが（長）」と昔より云い替えたることにやあるらん。知らず。初瀬川の水音澄て、夜もすがらいとど夢も結び難し。

一〇月五日

また夜深く初瀬の屋と（宿）りを発つ。（…中略…）今日は山中をのみ過ぎ行く。伊賀の名張を過て、阿保と

いう所に宿りぬ。

一〇月六日

また夜深く宿りを出ず。（…中略…）伊勢海道（街道）の六間茶屋に出ず。かねて七日に着くべき由云い遣りたれば、今日は迎いの人も来ず。日暮れ方、松坂に着きぬ。

宝曆七年丁丑十月 本居舜庵

この時の主たるテーマは、寺社見物だったようである。東大寺では京の方広寺との比較をしながらの見物。興福寺での記述は、一七一九年の伽藍焼失後の、復興事業の様子が眼に浮かんでくる。夕刻近く、猿沢池の辺りからの眺め、奈良の風景を堪能している様子が伝わってくる。

奈良に立ち寄る最大の目的であった長谷寺への参拝の様子は、当時の開帳の具体的な状況が伝わってくる。「よぎ」を巡るやりとりは、初瀬の人々の信仰心の一端

が伺える。

加えて、南山城の人々が、南方・奈良の方向を上、北方・京の方向を下しもと言っていることに気付くこと、さすがに地名に詳しい宣長ならでのことである。

三 一八〇一年（享和元）七二歳の奈良旅行

〔寛政十二年紀州行日記〕『本居宣長全集』一六巻
六二四頁〕

紀州侯の召命を受け、前年一八〇〇年（寛政一二）一月から三箇月間和歌山に滞在した後、大坂・奈良を経て八日七泊で松坂へ帰る際の日記（図4）。

二月二三日 晴天

朝六ツ半頃、若山（和歌山）出立。貝塚泊。

（二四日と二五日の大坂での道中は省略）

二月二十六日 晴天

五ツ過ぎ大坂立つ。平野、鞍作、太子堂村下の太子将軍寺、植松。

柏原の少し手前、右の方に長き大和川提の彼方に御陵のごとき山、三つ並て見ゆ。道より四・五丁に見ゆ。平野より柏原まで二里ばかり。

柏原より大和川の北の提を行きて、山路に入り、川の沿いを上る。青谷と云う里まで柏原より一里。是より立野へ一里なり。此の道、坂險しからず。坂中より見下ろす川の中に亀ヶ瀬とて、岩の多く群がりて平らに並びたる所あり。

立野村龍田神社、正面に二社、左の方に北向きに二社、いずれも千木・鯉木あり。また右の方、南向きに三社、これは千木・鯉木なし。件の六社、皆同じく御垣の内うちにあり。立野より立田まで一里ばかり。

（立田泊り。立田の西の入り口に小さき川あり）

河内より立野までの間よりは、二上山は他山に障りて見えず。立田近き所になりて少し見ゆ。ただし、山の形は変わりて、二峰の一つに見ゆ。南なるは見えず。

（間よほど離れて遠く見ゆ）

立田の入り口に小さき川あり。立田新宮は町中にあり。⁽¹⁸⁾此の所に泊る。

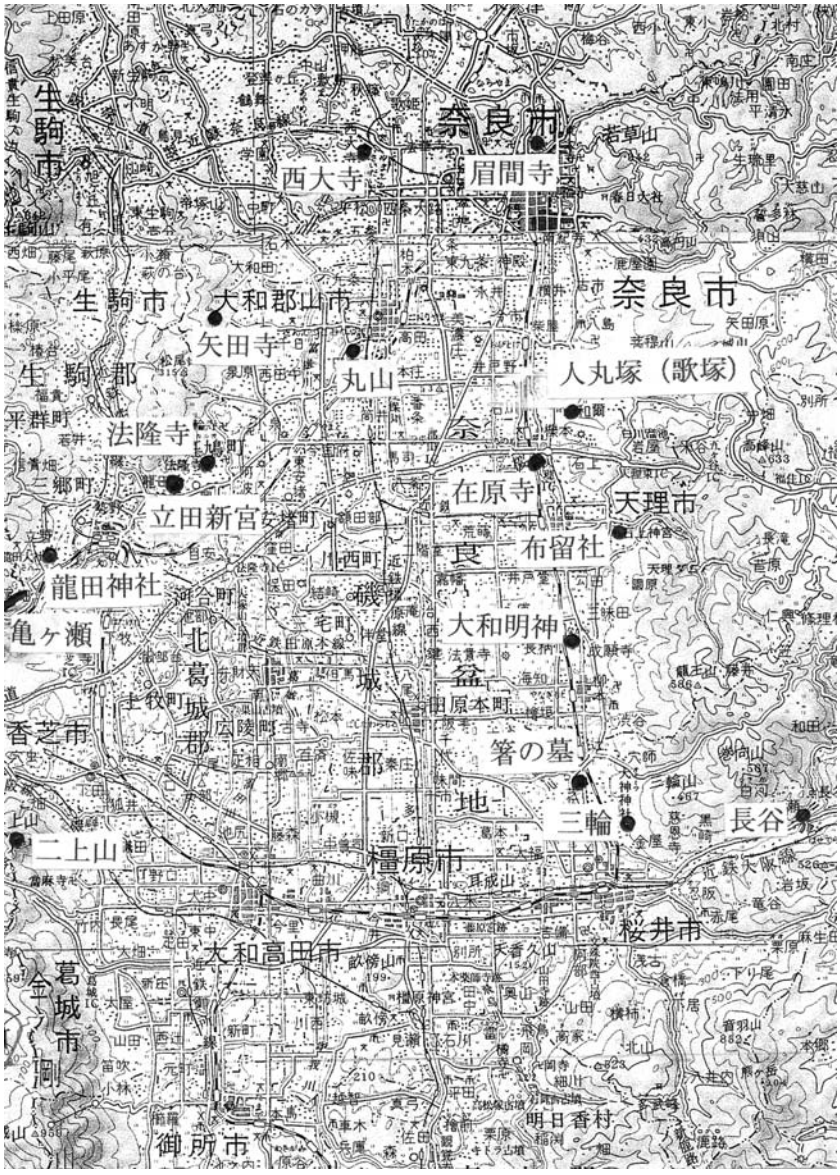


図4 1801年（享和元） 奈良の行程

二月二十七日 曇、郡山より雨少しずつ降る

立田より並松へはじきなり。少し離れたるばかりなり。並松の西の入口の前に丸き塚あり⁽¹⁹⁾。ほうらい(蓬菜?)これか。小なり。塚の南に続いて村も見ゆ。道より一丁ばかり南なり。法隆寺に詣ず。法隆寺より小泉〔矢田寺〕へ半里ばかりなり。小泉「郡山の少し西に陵のごとき塚あり。道の右なり。松生たり⁽²⁰⁾。小泉の東の出口に良きほどなる川あり。板橋なり。件の陵を今日記の丸山と云うとぞ。仁田四朗の祖先の墓なりと云う。

(法隆寺、立田山での歌七首省略)

薬師寺は郡山より七・八丁あり。招提寺も近し。招提寺の戌亥の方に少し離れて方来山の陵、道の左にあり⁽²¹⁾。廻りの池、いと広い。菅原村を通る。

海なせる 中に立てれば嬉こそ 蓬(よもぎ)が嶋
の名は負いにけれ

⁽²²⁾ それより西大寺へ十丁ばかり。西大寺に新に堂建てり。西大寺より尼ヶ辻までの間に、道より七・八丁左に成務の陵、神功の陵見ゆ(図5)。成務の陵の所を「みささぎ村」と云う。神功陵の所を「二條村」と云う。

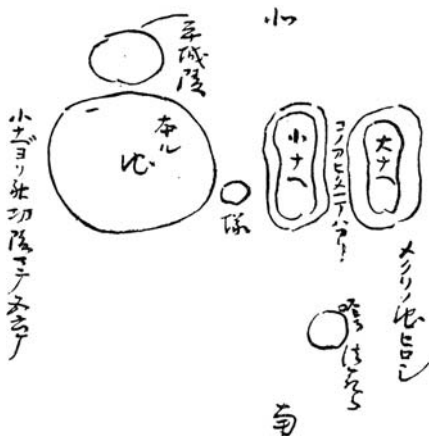


図6 大ナベ・小ナベ付近図(宣長の図)

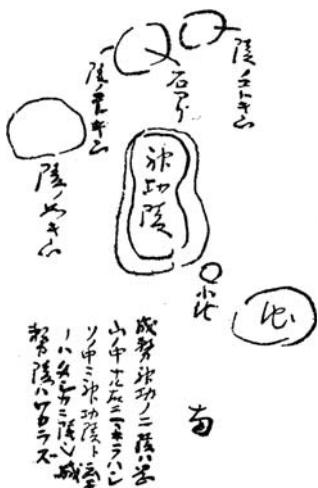


図5 神功陵付近図(宣長の図)

尼ヶ辻より奈良までの間、奈良の入口よりこなた三丁ばかり。道の北三丁ばかりに大ナベ・小ナベ二陵並びて見ゆ(図6)。共に木生たり。

尼ヶ辻より奈良へ二十丁ばかり。奈良に泊る。春日社、東大寺、興福寺に詣。

二月二八日 曇、雨降る、午後止、或は降り或は止む

眉間寺に詣す。⁽²³⁾佐保川、門前に流る。聖武陵は寺の境内、堂の後にあり。堂の後の山、即ち陵域なり。陵前に鳥居立り。此の所は門ありて、みだりには入れず(図

7)。さて、光明后陵は西に並べり。ただし、そこは寺の域内にはあらず。陵下の谷を隔てたり。光明陵に並びて右手に今一つ並びたるは、淡海公の墓なりと寺僧が云えど、疑わし。大ナベ・小ナベ、七疋狐のある処、眉間寺の前の左にあり(図8)。⁽²⁴⁾これも陵のごとき山なり。

帯解より一里ばかり南に、在原村人丸塚と云うあり⁽²⁵⁾(写真2)。鳥居立り、その少し南に在原寺あり。

丹波市より一里ばかりこなた、石上村より東へ廿丁ばかり入て、布留村布留の社に詣す。村の内に布留川流

る。反り橋あり。橋柱、行桁のみ残りて、橋板はなし。側なる別の橋より渡る(図9)。社は山にて、境内広し。村より三・四丁入る。社はこなたより右の方なるは、小さき神殿にて、世の常の神社の如し。左なるは山門、回廊ありて、仏堂の如し。門に石上明神と額あり。前、左右三方回廊にて、後一面は石の垣なり。高さ三尺ばかり、その形は図のごとし(図10)。

布留村より西へ十丁ばかり行けば、大道に出ず。朱の鳥居立てり。これ本道なり。この所即ち丹波市の入口なり。

丹波市より三輪までの間、道の左の方に、ここかしこに塚いと多く見ゆ。里人は千塚と云う。その中に、道より四・五丁東に、御陵とおぼしきも二所に見ゆ。

新泉村大和大明神に詣す。二丁余森を入て奥に立ちたまう。神殿三座なり。此の社は神主ばかりにて、僧はなしと見ゆるに、鐘楼のあるはいかが。箸中村箸の御墓、右の方、道の辺にあり。西の方に池あり。^(かど)柳本芝村など此の間なり。長谷に泊る。

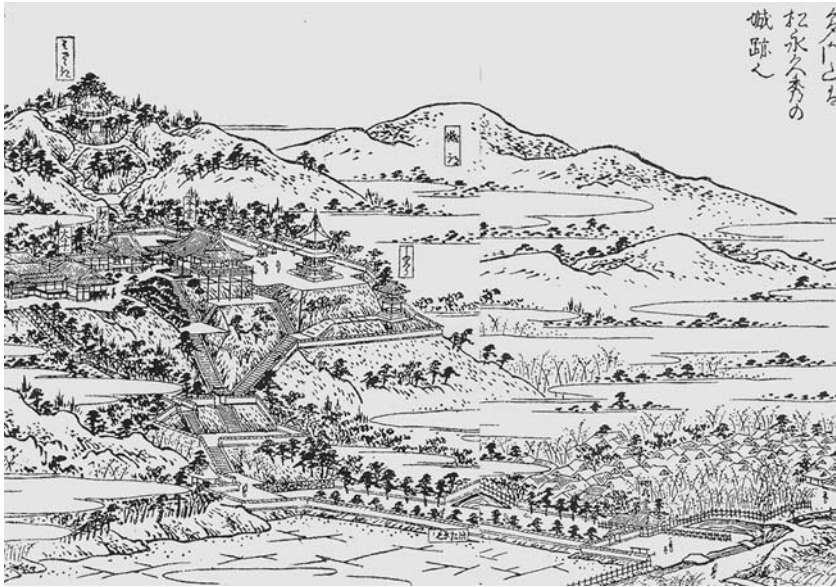


図7 眉間寺（大和名所図会）



写真2 歌塚 1732年建立（柿本寺跡／和爾下神社）



図8 隼人図（好古小録=1795年）

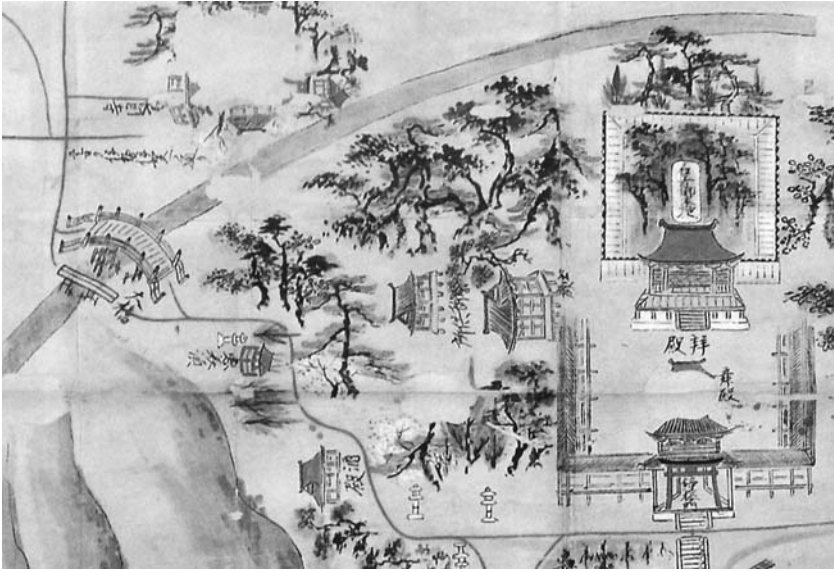


図9 布留社頭並山内絵図部分（『石上神宮』2007年より）

この時の主たるテーマは古墳見物だったようである。大坂での行程を省略してしまったが、二月二四日に大仙陵（仁徳陵古墳）に立ち寄っている。

二月二六日には、現柏原市の和川の大和川の堤から南方の古

三月一日 晴

曙に山の中の宿を立て、垣内にて物を食い、手水などす。

越えかねて 山の中なる一つ屋に 一夜を千夜の旅寝をぞする

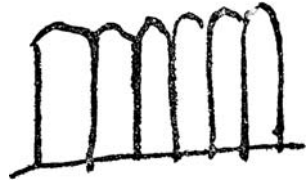


図10 石垣図（宣長の図）

の一つ屋に宿り、夜を明かす。甚だわびし。

二月二九日 雨天、午後晴、晴曇
朝立ちて 見つつそこゆる初瀬山 ふもとの里の 初桜花
夜に入、阿保山越え垣内に泊ま
るべきところ、風激しくて、提灯
を灯し難く、闇なる故に、やむ事
をえず、垣内のこなた一里、山中

市古墳群を眺めている。

二七日は並松入口の丸き塚（藤ノ木古墳？）、陵の如き塚・丸山（新木山古墳）、方来山の陵（垂仁陵古墳）、さらに佐紀盾列古墳群を巡っている。宣長の頃には、今日「ウワナベ」「コナベ」と呼ばれている古墳は、「大ナベ」「小ナベ」と呼ばれていたことが分かる。

二月二八日には大和古墳群を抜ける途中に、「御陵とおぼしきも二所・崇神陵古墳と景行陵古墳、さらに箸墓を見ながらの旅路である。

四 まとめにかえて — 『菅笠日記』との比較 —

『菅笠日記』は四三歳の宣長が一七七二年（明和九）三月五日に松坂を立出し、三月一四日に帰着するまでの一〇日間の旅行記である。『菅笠日記』が版行されたのは宣長六六歳の一七九五年（寛政七）のことで、実際の旅行から二三年後のことである。

一七七二年の『菅笠日記』に対応する旅行中の日記（全集一六巻 三二七頁）には

三月五日 吉野観花に行く。今朝発足。同伴、覚性院・小泉見庵・稲垣十助・同常松・中里新次郎なり。今夕、伊賀国伊勢地に宿す。

六日 貝原に宿す。

七日 千俣に宿す。

八日 吉野に宿す。

九日 吉野に宿す。

十日 岡に宿す。

十一日 三瀬に宿す。

十二日 貝原に宿す。

十三日 石那原に宿す。

十四日 帰郷。

と記されるのみである。旅行中の見聞記録は全くない。『菅笠日記』の内容が一七七二年の旅行中に記された見聞記録なのか、版行までの二三年の間に創作された部分が含まれているのかは分からない。また、今日見ることのできる版本と、宣長の自筆稿本を比較した松戸清彬は、旅行後、版行までの間に推敲が行われていることを

明らかにした。⁽²⁶⁾

このようなことを踏まえると、『菅笠日記』での記述が、一七七二年当時の奈良の状況を正確に伝えているのかは分からないと言わざるを得ない。

一七五七年と一八〇一年の奈良旅行記は、宣長の眼に入った生の奈良の様子が記述されており、博物館資料論的に言えば、一七五七年と一八〇一年の旅行記録は一次資料であり、『菅笠日記』の記述は二次資料と言わざるを得ない。

おわりに

管見によれば、一七五七年と一八〇一年の宣長の奈良旅行に言及している者は少ない。

出丸恒雄『宣長の青春——京都遊学時代——』（光書房一九五九年 一八一頁）では長谷寺開帳の様子を物語り風に紹介する。小林秀雄『本居宣長』（新潮社 一九七七年 二九頁）では、京都遊学後に奈良を通過していることに僅かに触れるのみである。城福勇『本居宣長』（新装版人物叢書 吉川弘文館 一九八八年 一八

五頁）では、一八〇一年「二月二十三日、若山をたち、大坂、奈良、長谷を経て、三月一日松坂に帰着た。」とあるのみである。

本居宣長記念館のホームページには奈良旅行に関して「奈良」と「長谷寺と奈良」の項目があるが、奈良論としては充分とは言えない。

このような状況にあつて、一七五七年と一八〇一年の宣長の奈良旅行記は、当時の状況を知る上で貴重な史料と考え、全集に翻刻されているにもかかわらず、あえて当時に身を置いたような心持で紹介してみた次第である。

註

- (1) 『大和名所図会』巻二「奈良坂 南都北の入口をいふ。此町を奈良坂村ともなづく。般若坂 奈良坂より佐保川の石橋までをいふ。又般若路ともなづく」
- (2) 東大寺転害門。
- (3) 宣長が見た東大寺大仏殿は、一七〇九年（宝永六）に再建された現在の大仏殿。正面五七・五m・奥行五〇・五m。宣長が見ていた方広寺大仏殿は二代目（六一二—一七九八）。南北（正面）約九〇m・東西

- (興行) 約五五 m。
- (4) 一六六七年(寛文七)に木造で新造された方広寺大仏は高さ約一九 m。一六九一年(元禄四)に完成した東大寺大仏は高さ約一五 m。
- (5) 三笠山・若草山・御蓋山は混同されることが多い。宣長が見た「すんべりとして」「笠をうつふけた」山は、今日言うところの若草山であろう。「木深く繁れる山」は春日社の神域である御蓋山であろう。宣長も山名を混同していたようである。
- (6) 『大和名所図会』巻二「春日大宮四社大明神」とあり。武甕槌命・経津主命・天兒屋根命・比売神の四神を祀る。
- (7) 鹿の角切は一六七二年(寛政一二)から始まる。
- (8) 興福寺は一七一七年(享保二)五重塔を残して伽藍焼失。
- (9) 南円堂は一七四一年(寛保元)立柱、一七八九年(寛政元)再建。
- (10) 元興寺五重塔。一八五九年(安政六)に焼失。興福寺五重塔は約五〇 m、元興寺五重塔は伝承では約七二 m。
- (11) 明治維新の廃仏毀釈の際に廃寺。その際、本堂(観音堂)は大和郡山市若槻町の西融寺に移築された(『改訂天理市史』上巻 一九七六年)。
- (12) 拝殿は一六六四年(寛文四)再建される。
- (13) 兩宝童子立像。室町時代。
- (14) 難陀龍王立像。一三二六年(正和五)造立。
- (15) 宣長一三歳、一七四二年(寛保二)七月二〇日に参詣。
- (16) 本尊、十一面観世音菩薩立像。一五三八年(天文七)造立。像高約一〇 m。
- (17) 興喜天満神社。『大和名所図会』巻四「興喜山天神一名三燈嵩といふ。観音堂の東にあり」
- (18) 立田新宮については『大和名所図会』巻三「龍田新宮 法隆寺より六・七町坤ひつじまにあり。民家軒をつらねて、龍田町といふ。…(中略)…龍田の祭礼の日は、法施の衆僧三十人を、法隆寺より奉りなんとすなり。それより永くつたはりてつとめられけるが、立野までは程遠しとて爰こゝにうつしける」とある。
- (19) 藤ノ木古墳か。
- (20) 大和郡山市が設置した説明板には「新木山古墳 新木町にあり、陵墓参考地にされている。丸山古墳とも呼ばれている大型の前方後円墳である。…」とある。
- (21) 垂仁陵古墳。
- (22) 工事中の本堂を見たのか。本堂は一七九八年(寛政一〇)再建工事着手し、一八〇八年(文化五)に完成。
- (23) 眉間寺は明治初年に廃寺となる。
- (24) 『大和名所図会』巻二「犬石 南陵の乾ぬいにあり。此

所元明帝の陵と云ひ伝ふ。此石、陵の四方に建てし石なり。若隼人像なるか。後考あるべし。『好古小録』(一七九五年)では「元明天皇御陵碑 ……又御陵の上、隼人の形を鐫る石、三枚を立。一は立、二は踞す」とある。

(25) 『大和名所図会』卷二「柿本寺 櫛本村にあり。人

丸塚 当寺にあり。石碑あり。歌塚と書す」(写真2)

(26) 杉戸清彬「菅笠日記」管見」(新日本古典文学大系

六八卷付録『月報』七九 岩波書店 一九九七年)。